

子宮移植

木須 伊織／阪埜 浩司／青木 大輔

Summary

近年、先天的もしくは後天的に子宮を失った子宮性不妊女性が自らのおなかで児を得るための1つの選択肢として子宮移植が考えられ、2014年10月には世界ではじめての生体間子宮移植後の出産が報告された。

子宮移植は多くの医学的、倫理的、社会的問題が内包され、その臨床応用にはそれらの課題を十分に議論したうえで、慎重に検討されなければならない。しかしながら、この技術は子宮性不妊女性に福音をもたらすことが大いに期待され、新たな生殖医療および臓器移植医療として臨床展開されていく可能性を秘めている。

Key words

子宮移植●子宮性不妊

カニクイザル

代理懐胎

Mayer-Rokitansky-Küster-Hauser 症候群

Iori Kisu

慶應義塾大学医学部産婦人科学教室特任助教

Kouji Banno

慶應義塾大学医学部産婦人科学教室専任講師

Daisuke Aoki

慶應義塾大学医学部産婦人科学教室教授

はじめに

子宮性不妊女性に対する子宮移植の臨床応用は、2000年にサウジアラビアで生体間で行われて以来¹⁾、約10年以上の動物実験による基礎データの蓄積を経て、2011年8月にトルコで脳死ドナーから行われた²⁾³⁾。2012年9月からはスウェーデンで生体ドナーからの子宮移植の臨床研究が開始された⁴⁾⁵⁾。これまでに計13件のヒトでの子宮移植が実施され(2016年5月現在)、2014年10月にはスウェーデンにおいて世界ではじめての子宮移植後の出産が報告された⁶⁾。これまでに同グループから計5例の出産の成果が挙げられている⁶⁾⁷⁾。これらの報告により子宮性不妊によって子どもを授けられない不妊夫婦に福音をもたらし、国際的に子宮移植の臨床的展開に関する議論が急速に進められるようになった。

子宮移植はほかの生命維持臓器の移植と異なり、いわばQOL向上のための臓器移植とも考えられる。本技術には産婦人科医療および移植医療の両者の立場から多くの課題が存在する。これらの課題の一部に対しては、これまで基礎実験やヒトにおける臨床研究により検証されてきたが、未解決な課題がまだまだ多く残されているのが現状である。本稿では、子宮移植研究の現状について概説する。

子宮性不妊患者の現状と背景

世界保健機関(WHO)は不妊症を1年以上の期